通俗日本小史

渡邊義方編輯

第六編

上

A557
11

染崎延房撰閲
渡邊文京操觚　梅堂國政畫

通俗日本小史

東京書肆　金松堂發兌

48-8442

通俗日本小史第六編の序文

約莫這第六編い北條九代間の編年概記よして大概平和の詰説の〳〵往々戦畧の事なりしも似ようしてのみ多くして看客の倦なまたんい先刺兼知の幕あれどそをしも省畧なさぐるい治乱得失盛衰栄枯古今の事跡を童蒙婦女子よ知らしめんとの文京が婆心首尾全うしんを欲してゆう遮莫此等の記事ゆゑれい珍談佳話も記せよ由なし所謂是も道行ゆれば呻と伸を忍び玉ひ倦ぎ厭ぎ次篇まで讀次たまへと序の半丁を借て一寸と断り措き爾り

明治十四年季秋脱稿之吉日　渡邊文京漫題

藤綱五十銭を費して水より沉み十銭を拐る

元軍十万颶風の為
に船艦ともに沈
没し大魚の腹中に
葬むらる事い本
文に委し

上の巻

源氏亡びて北條義時宇内の政権を掌握し稍専横を極めしを後鳥羽上皇怒らせ玉ひ兼久の役より泰時経時時頼宗時等の得失三浦一族滅亡の顛末元軍十万我が西海より来り寇るより終る

下の巻

一陣の颶風元の十餘万の兵を鏖殺しまるゝより起り高時の暗愚狂暴時より後醍醐帝の賢明ある在まさず北條を伐んとして事あらず一時捕へらるゝより終る

通俗日本小史六編之上

東京　渡邊文京操觚　染崎延房撿閲

實朝既に薨ず源氏の正統是に至つて絶しりべ政子則ち義時と議し使者を京師に上せ後鳥羽帝の子を迎へて鎌倉の主となさんと請ふ上皇更に許し給ひぬ依て左大臣道家の三男頼経を請ふて鎌倉に下し主将と仰ぐ頼経年甫三歳将軍職に名のみ坐していまだ東西をも知らしめざる是に於て天下の

政権おとぐく北條氏ゟ帰を初め頼朝の姉某中納言能保ゞ妻ゟ嫁ぎて一女と生む良経その女を娶りて道家と生む頼経い道家の子ゟして頼朝の血統とひくの縁故ゝりとめて即ち頼経を主とせーゟと

ぞ是歳四月天子位と皇太子ゟ禅りたまゝ懐成親王位ゟ即くゝ主と仲恭天皇とゝ」是ゟ先後鳥羽上皇武臣の権と専らふゝ王綱常て振ハざる低憤ゝり帝位と退りたまゝの後も白河帝の故事ゟ倣ひ北面西面の武士と置て日夜武事と鍛錬せーめ事ゝる

用ゟ供ふ上皇ゝる時熊野ゟ幸ーたまひ途ゟ関東の家人仁科盛遠ゟ遇ひ人品骨相賤ーゝゝぞ適晴英雄の風姿ゝりとて勅ーて西面の武士ゟ補せゝーを義時聞て大ゟ怒り盛遠い鎌倉の家人ゝるゟ私檀ゟ王臣とゝる おて奇怪ゝ思と遂ゟ盛遠ゞ采地と没収ぐ上皇勅ーて和解せーめその采地と返せよと懇勅数度ゟ及べども義時常て勅と奉ぜざるのゝゝゝぞ上皇ゞ寵姫亀菊ゞ化粧料ゟ宛行たれー長江倉橋の二荘園ゝりその地頭常ゟ亀菊と侮り無礼の挙動少ゝら

らぶ積日の餘憤拂ふ由なく義時かくまで驕慢な
る若き人を忍ぶべくも王威い正し地に隨ちく
暗黒世界とのりもやせん今よりて除うをべ何をの
時をや期をべきと逆鱗慷慨の溢るゝところ遂に天
下の乱を引出し王城の地に干戈を動うを是や承久
三年の兵乱是に胚胎せり頃も五月二十八日上皇乃
ち城南寺の流鏑馬に托うせ幾内の兵千七百人を
召募を重立たる人々に藤原秀康三浦胤義仁科盛
遠等を始めとして勇を立て逆臣とたゞ一挙に鏖殺

せんと切齒扼腕東の天と遥に睨んで屯在せり是に
於て義時追討の詔旨を出し五畿七道の將士を召集
爰に上皇が北面の武士に押松丸といふる者なり足疾
きあと衆に勝れ日に四五十里の道程を走りて聊も
疲労る色なくかの韋駄天もかくやと疑ふまで是稀
代の疾足なりをの押松に令旨を齎し夜白兼行関
東に下し武田小笠原千葉宇都宮三浦等の諸豪族を
歴説し官軍に應ぜしめんとせしうど從ふ者一人も
なし去程に義時いよの警報を聞とひとしく厳しく

鎌倉を搜索して加の押松を捕縛つ政子と倶に幕府
に出で諸将を簾下に會して軍略を議す三浦義村安
達景盛等進んで曰く関八州の咽喉たる足柄箱根の
險に拠り以て官軍を拒ぐんに地理に委しき主客
の勢ひたとひ巨萬の兵なりとも容易く敗らるべく
もなしこれ上策なりと議するを暫くして押
止め進て出たる大江廣元その議決めて然るべし
と陰阻を恃て日を曠くし持久なるに味方の中
變心せんものありともいへど是自ら敗を招く拙

策といへども今日の事たるや先将軍頼
朝公千辛万苦漸くに乱を平らげ治を開き幕府草創
の大業も安危存亡の一挙に在り坐して待べき時
にあらず成不成は天に在り為不為は人に在り只成
敗を天に任せ進んで京師を攻むる利を左右
にせやと委ねず辯舌厲まし立る卓論高議いづれも
感嘆せざるなく忽ち廣元の議に決し泰時を以て
將とし召募の兵士等馳集まるとまつ間遲しと泰
時はその夜直ちに相模守時房前武藏守足利義氏

重綱父乃
馬尾ニ縋り
泳ぎて宇治
河を渡る

駿河守三浦義村等と倶に手兵僅に十八騎を従へ京師をさして進発せ行く三日駿河路に至る頃及馳加する将士十萬餘騎東海道より進むもの式部丞朝時は北陸道より小笠原長清武田信光東山道より道を分ちて攻上る勢威極めて猛烈なり凡そ其の後に従ふ者父行けば子留まり子行けば父留まり豫ねその後援をなす總軍まぐ十九万騎義時乃ち押松を放ち京師に還して言へしむるやう臣義時犯せる罪あるを討せらるる寛を訴ふる所あらんとまらに術を尽す聞く陛下戦々恐々たるを好きたまふと謹んで臣が長男泰時二男朝時以下十餘万人を献じ輦下に於て戦へしむ尚聖慮に厭たまはざるに猶二十万人の将士なる臣自ら将として進で西上せんとまと虚勢を設けて脅迫の詞を聞て驚ろく官軍鋭気頓に挫けしものの上皇親ら諸軍を部署し宮崎定範仁科盛遠等越中を拒ぎ藤原秀康三浦胤義等を分ちて九隊とし尾張美濃を拒がしむ兵およそ一万七千餘人東

軍の先鋒武田信光四万騎を率ゐて大井川を渡り
官軍の将大内惟信と撃てあまと走らし鋭鋒防ぎ
難き様見て亂義秀康等退いて宇治勢多を守る
此時よ當つて泰時の全軍信光と合し鼓譟の声天地
を動かし鯨波を作りて進撃を京師の騒擾一方か
らを乗輿敵山よ幸を官軍の猛将山田重忠見兵三
千を従へ勢多の橋梁を截おとし流まと夾さんぐ
防戦の采配按目なりざれを左右なくを打も敗を
を賊将時房戦ひ利あらを兵を収めて引退く宇治の

流まの此方まの前中納言源有雅参議藤原範茂等
南都の僧兵一万餘人と以て彼方の岸なる泰時と相
對して陣取りし時しも頃へ五月雨のふりを降ぎ
降そぐ晴間もなりぬ霖雨ふ河水殊ふ漲りて石籠
を洗ふ急流を渡るくもなりざれを且る後待て戦
いんと戦期を延を泰時が軍慮の進退微妙くも彼
ぐ油断と撃べやと三浦義村が子泰村按駈ふして戦
うひ後挑むさたれ雨夜のあとよして暗きふ暗し其
距離流まと隔てし暗夜の接戦互よ矢と射出して

矢叫びの声凄まじくスハ戦端を開きしぞ進めや兵士
後ろ〳〵とサッとうち振る泰時が指揮の下より全
軍一度に鯨声をあげつゝ攻かゝり矢を射る如き急
流を物ともせざる坂東武者雨霰と飛来る矢石を斬
ちらひく競ひ渉りと渉さんと尚も劇しく官軍が
射出す矢尖は掛らぬ射斃さるゝ溺るゝあり
戦死せるもの数を知らぬ東軍の部将佐々木信綱芝
田兼義もしく馬に乗入て浮つ沈つ渡りしが信
綱辛くも中流なる中洲に達して息つく敢ぞと見る

べ吾子重綱も未だ十五の初陣なれど父が乗たる馬
の尻尾に縋りつゝ泳ぎて渡り来りしあり兼義氏等
續て渡り進んで官軍と冒を兼義路傍の民舎を壊ち
筏を作りて軍を渡せ渡り果たる東軍の破竹の猛勢
向ふに前なく官軍あとぐく潰へ走る右衛門佐藤原
朝俊糟谷有久等ども戦死し三浦胤義山田重忠等自
殺せ泰時進んで樋口河原に至る上皇やがて叡山に
幸し使を泰時が陣営に遣へし曩に褫奪せし義時が
本官を復し征討の詔旨を止めたまへ泰時乃ち時房

と六波羅に陣し餘黨を捕へて誅戮し捷と鎌倉に報ぜ是に於て義時い帝と廢して高倉帝の皇孫守貞親王の子と是と後堀河帝と遂に後鳥羽上皇に逼りて髮を剃しめ隱岐の國へと徙しまゐらせ順德上皇を佐渡に雅成親王と但馬に賴仁親王と備前に徙し專横驕恣至らざるなし人多くして天に勝とい義時の謂ふ且夫の賴家實朝のおとたふその終と善まるなしその應報速なるも神ありとなすべし是時北條氏陪臣として至尊を制御し巧なる世界を籠洛に神人共

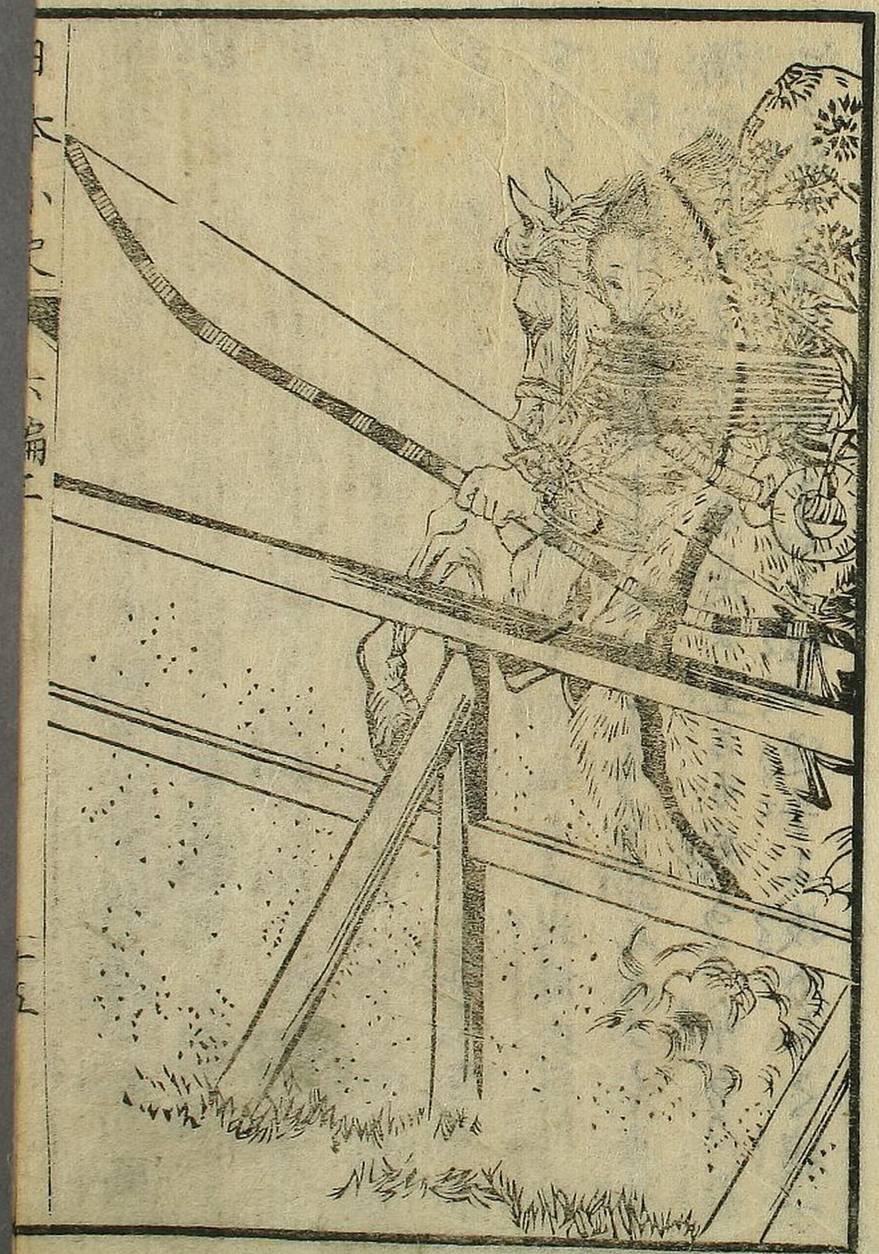
に憤り天地に容ざる無道の逆臣然るにその家九代を保ち漸く高時に至ッて亡ぶ蓋し天の定まると不定るとに因り善惡應報の遲速なるまゝ是自然の天理なるにも間話休題かくて泰時時房い乱黨既に夷らぐとなりて尚も餘黨のなゝざらんことをその保留まりて京幾を鎮撫し分て六波羅の南北に居りしに世まゝと西六波羅と称を元仁元年義時病で卒をその子泰時續で執權たり時房もまゝ東に帰る時代時盛代ッて京師の守護たり泰時人と為り温

厚篤實鋭意治を求め士を愛し民を憐み天災なる毎に倉廩を開いて窮民を賑はしその身は儉約を旨とし常に綿衣を著して聊か驕りの色を見せず大に士人の心を得北條氏の威權日に熾んなり嘉祿元年六月二位禪尼平氏卒を年六十九実朝殺さるの後政務を鎌倉に聽くこと七年世に尼將軍と稱せ是歳大江廣元もまた卒を貞永元年泰時評定引付の両職を置きて政務を取らしめまた三善康連と議し成敗式目五十條を定めて訴訟を審理を判決頗

ぶる宜しきを得るとなり其一斑を掲出せんに武田信光海野幸氏と采地の畏を争そなて聽に訴へ幸氏の理直なるを以て泰時即ち決を下して幸氏に予に或人泰時に告て曰く信光深く公を御む宜しく戒心したまへとなり泰時うち笑ひなでて去る事のなるべきや曲直を分ち理非を糺すにあり有司の職務をもや怨を畏きて法を枉げ邪を誣て正と せを是將怨を受もせん吾苟くも執權さるる僻事をなすべきぞとその廉直なる大概かくの如し嘉

禎二年四條帝の御宇泰時従四位下に進む仁治三年六月
卒す年六十嫡孫経時執権職を襲ぐこの歳天皇崩
御まします群臣土御門帝の弟二皇子邦仁親王を迎
へ立つまつると後嵯峨天皇となる寛元二年征夷大将
軍頼経職をその子頼嗣に譲る四年経時病ひに臥
し弟時頼に執権職を傳へて卒す時頼の従弟光時故
将軍頼経に寵遇せらるる時頼と権を争そひあれと殺
さんと企てしが事発覚して為すところと知らも
光時髪を削りて罪を謝す時頼聴さず終に光時を伊豆

に流し頼経を京師に逐帰せしめその近士三浦光
村兄泰村および一族と謀り兵を挙て北條氏を滅ぼ
し而して頼経を迎へ復たび鎌倉の主とせんと潛に
兵を集む泰村に義村の子ありしてその時已に卒せし
うど泰村の威権仍盛んに族黨最とも廣し隱さ
るるより現そくつるく迅くも聞ある時頼に大いに驚き
安達義景弟時定をして兵を将みて押寄つたる安々
と三浦氏の第の四方をとり囲む息ともいれず攻立
てり思ひ設けなる襲撃に防ぎ戦うもの



時宗ガ射藝
一発ヲ而シテ的中ス

〻味方の軍機合期せざるを敵ならんと勝に乗り風
上より火を放ち火勢ととりて逼り撃ついとも劇し
き矢叫び太刀音烟りの中に焔び猛火に焦され面を向く
べきやうもなく秦村の軍大いに敗走して法華堂
に入り頼朝の影前に列座し秦村天を睨んで嘆ト
て曰く我族四世功を幕府に累ねまさに北條氏の外戚
となり内外を輔翼して権威きはめて盛んなりしも尚
禍害を免るゝなきはこれ是に至るも天の命なり孰
とか怨み誰をか憎まんと短刀逆手に拔きうちさ腹一

文字に かゝ切つて匍匐俯して死でゝ光村以下宗
族二百七十餘人おみな枕に俯して かさなり皆自殺し
て横さまに屍い積で累々さう痛ましい哉三浦梶門
名家と羨稱せられし三浦の一族爰に至りて亡滅せし
い哀まとりくに愚にとそ天皇位を皇太子に讓る久
仁親王立つまゝ後深草天皇とゝを建長四年夏五
月將軍頼嗣ゝを時頼と亡ぞさんとせしが時頼をや
くも探知して直に頼嗣を捕へて將軍職を褫奪し
京師に放逐せ曾頼嗣の祖父前摂政道家暴に卒を

時頼乃ち後嵯峨帝の皇子宗尊親王を奉迎して鎌
倉の主と仰ぎ詔旨して征夷大将軍に補せらる親王
たるの故を以て時頼只管尊崇の禮を厚ふし新に
幕府を作りてあまを奉ぜ而して政権い依然北條氏
の手に在り」時頼祖父の業を継ぎて士を愛し民を恤
まず拮据黽勉治を求め泰時が定むるところの式目を
遵守して一も違ふことなく賢を挙げ能を用ゆ嘗て
門閥に拘らず相摸の土民青砥藤綱なる者ありし時
恰も大いに旱拔し稲麥殆んど枯んとせかくて年も

凶作なりしかども一雨降らしと天を仰ぎ雨を待つ民
百姓の辛苦を察し時頼雨を祈らんと僧を集めて厚
く布施しかさく慈善を旨とし大く信心いよく怠さ
らず又親ら三島明神に詣でく雨を祈るその時藤
綱課役に充りて神に捧ぐる許多の贄を運搬ぶ車
の宰領して牛を逐つて来りしが牛い炎熱に堪ずや
なりて小川を渡さんとせし程に河の央に佇立く
斃たぐしく溲せしうで藤綱叱していくるやうなる
無心の畜生なる汝もまた北條公が無益の施與に

傲へる欲と憚うる体なく罵ると傍へよ在りし人々
ごいと不審く思ひるごいうでゝ牛ご北條公の施與
よ傲へるおとなるべき備も解しがゝた詞の端々要
おそなるめ聞うまゝと問へをされをとよ如何よ
畜類あれがとそおの早拔をるるあゝを盗ぞ田面よ
渡せざる濺ごを少しい盗なゝん欲今僧侶よ布施を
も貪婪るい利を見て集まり廉直るい謂まるく
財を受ゝる紙耻るごゆ寧ろ餓るも来らざるべし
おまゝ賣僧ご貪婪の心を飽まよ供まるのを事

よ益みきのゝるゝぞ至重の財を耗費まる何ぞ牛
の路よ渡ゝるよ異ふゝんとおの事いゝ時頼の
耳衆よ入り藤綱と召してその才見を熟視しれ
ごご真の補翼るゝと竟よ擢んで引付衆とみま
公文る者なり北條氏の家人と田畝の境を争そゝ
て訴訟を起ぞ衆ゝふ時頼を畏を法を枉げ理を矯
ゝ殊更よ公文を曲者とを獨り藤綱抗議屈せぞ竟
よおまを直ゝを公文深く喜ゝびいうでその恩義よ
報ゝんと夜密よ銭を包ゝ藤綱ご家の門内よ投入

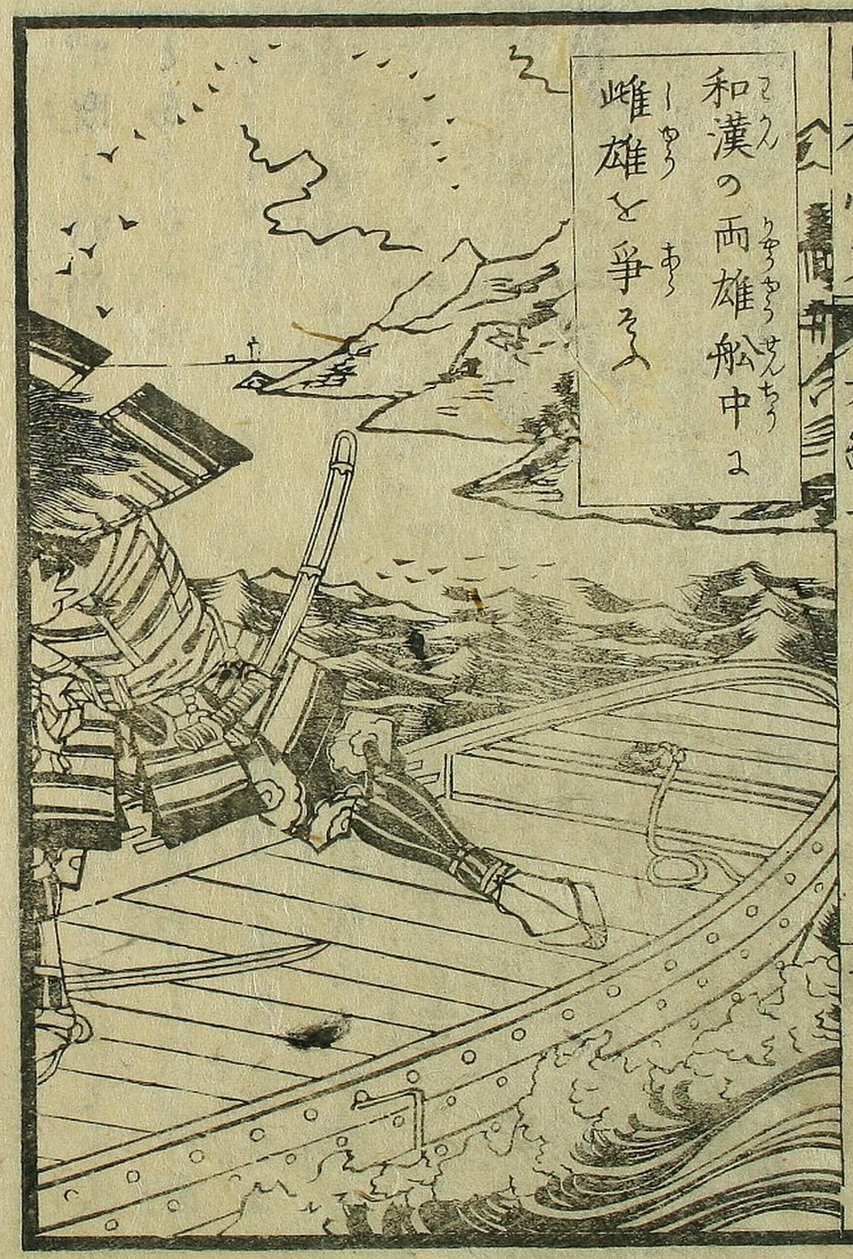
きて去る藤綱大いに怒り直ちにその銭を郵還せその廉直ふ斯のごとしなる時藤綱夜道を行り小橋を過る折しも誤まつて銭十文と水中ふ遺せしうべ炬火を買ひ人夫を傭ひ水を照して捞り求むその費へおよそ五十文或人曰くたとへ十文を捞り得るとも四十文の損を償たるを無益のわざと候らいぎやと詰る詞ふ藤綱ら莞爾と笑ひて答ふるやう今費やせる五十文い吾失ふ人ふ得ぬ水中ふ遺せし十文い今取らぎい天下の財を空しく水中ふ埋もんのみ我六十文を取て世人ふ益をこそ大いなる所得といふべしと藤綱自らその身を儉ふし人ふ施こすをもて樂しみとし日ふ一飯を喫ふの衣服い敝れ袴い汚れ常ふ白鞘の刀を帯し廳堂ふ立つこと恥る色なし時頼禄を増さんと欲し詞を設けていふやう昨夜八幡神我夢ふ顕れたまひ告て曰まいく汝国家の太平を願つて藤綱の禄を増さべしと告たまふと見て夢覚たり依て俸禄五百貫を増さべしといふふ藤綱肯うぜ八幡神藤綱の禄を

増せと命ぜを増したまふ若し藤綱の首を刎よと
告たまふて藤綱の首を斬るべしかくまを高禄の侍
もて足らぬと承諾けしたまふ「とぞ」時頼深く佛
法を信じ宋より渡来の高僧道隆に就て禅学を学
び大いに悟る処あり一禅宇を造営して最明寺と
号し康元元年髪を削りて最明寺に老ひ後三年
を経て卒を長子時宗幼稚なりて重時の子長時代ッ
て執權となる是より先き天皇位と皇太帝に譲る恒
仁親王立つまを亀山帝とまを時宗入と為るり剛

毅不拔武藝才力衆に勝れ幼稚より射藝を能
し百発百中百歩の外に柳の嫩葉を射て落せしか
の養由基も三舎を避くべし曩日将軍頼嗣将士の
武藝を試みんと流鏑馬會を催ぬせしが指を的の
距離甚だ遠くその矢ありるさに達せるい稀に半途
にして弓勢衰へ空しく地上に落るあり偶然ある
さに達せるも射的る者とそなるりが時宗此時年十一
ふり分け髪の小冠者なりが召に應じて徐々と行
粧殊に花美に弓矢手狹く黒毛の駒に白鞍おいく

うち跨り騎出たるその形狀優しくもまた勇ましきかな是一個の美少年併居る諸將士汗を握り的否いかふと見て居る時宗もたゝ輪乘とうけ時分をまと鞭を揚げ両拍蹴入れて墓地倉に疾風のごとく駈出て弓に矢交へ身を仰天こきりしくく彎絞り飄弗と射て放くべ睨ひ違えば的の真中第一発に貫ぬたり頼嗣とゞめ数多の人々射さりや射たりと思へば拍手喝采どよめき渡り忠ぎしい鳴も止ざりける子を見るもと親よりも此

時既に時頼へ吾子の顔敏なる哉知り時宗こそ人とあらた大任に堪るの器なりと慈愛まこく厚うしゝ是に至つく父に代り執権の威権昔日に倍せ是時に當りて支那もまた兵乱曾てやむ時なく宋の世殆んど涜季に屬し四百餘州い麻のごとくに亂れ宋元連年兵を接へ一勝一敗盛者必滅三百餘年の宋世も元主忽必烈に滅ぼされ乱離稍く治まりた鹿を狩獲し忽必烈なれも国威を海外に示し版図を擴め我国をも掌握ゐさんを不敵の建


和漢の両雄船中に
雌雄を争ふ

年忘

策韓人として國書を齎らし使しを曰はるやう
自今以後隣国の好誼を結び互市貿易の道を開き
自他の便益を謨らんとは若し否をたまふあらば兵
力をもて攻撃せん諾否いかんと不遜の文辞時宗
大いに怒りて曰くかくまで我を侮辱する憎き彼奴
ら無禮の暴言冗しくお目汚詐をべしと奏しき元
使の首を刎ねえ軍若もせめ来らば彼等ら膽を冷
さしめんと防禦の準備等閑なりき兵を練り武
を講じ彼よ孫呉の兵法なりとも我まさに不思議の

軍畧をもて出没自在千変萬化開闢以来外国と兵を
交ゆる戦争の手始め来るや應と待ちうどよ頃を後
宇多天皇の御宇建治四年秋七月元兵かよそ十餘
萬人大艦數艘よりうち乗りて戈を植て旗を飄へし
をさく軍威を張設け舳艫相銜を海を掩ひて来り
攻む待設けたる我将士等素破と一同勇を立ち
彼等ら未だ備へざるその虚を襲撃みさんとて鎮
西の探題上總介北條実政麾下の武将草野七郎よ
計畧を授け精兵僅よ一百餘人と迅艦二艘ふうち

乗りて志賀島の沖に碇泊せし彼が第二の兵艦
間近く飛がおとくに漕寄り此時日いたく暮て
て天さへいとぐかき曇り黒雲一抹咫尺も辨ぜかく
るを
幸しとて努めもて油断なくたる元兵ぶ透と
窺ひ我将士等手操り出したる鈎索を虜艦に投
うけ身を跳らせ飛入るなり攀上るなり齊しく声と
振り立て虜等慌てに承まわ汝等来らを一人
も生て國へを還さじと待あと爰にやく久し疾日
本刀の鋭鋒を受けて見よやと呼ばりて襲撃

るを是ぞ驚く元軍を天より降しう地より湧し
あそもあの奇兵は何処より現出せし狡を知よ
なく怪しを思ふ神出鬼没彼は正しく妖術にて波
上飛行の自由を得て偖こそ容易く我艦を襲ひ撃
と覚えさうなる不思議のあとありと心に十二分の
鬼胎を懐き周章狼狽を立つと我兵得りと追
立て追つめ當るに任せて斬立る鉄も断べき秋水
の晃めきとさる暗夜の目的敵とりづきと分よ
なく元軍互に同士撃して討るなり傷くなり瞬

く間よ敵の首級三十餘級を撃とりたり虜将王冠
つ始めよろ噪立つ兵士を罵励まし拒ぎ戦ッく在り
たりしが漸次よ敵の勢ひまるどく既よして艦さへ
も奪ひとりまん形勢ふまび怒る面色朱を注ぎ鬢
髪逆立ち目眦烈け奮然として跳り出で戦ふ間と彼
此と暗ふも夫と透し見て是ぬんぬりと思ふぬぞ勝よ
来る血刃うち振り連りふ進む七郎が後の方よ馳せ
寄て無手とをりよ組付たり此方もさる者少しも
噪がぬ撃物戛理と投ぎて腰を捻つく渡りあふ和漢

のカ士と強将が優ぬ劣らぬカ量迅業両虎深山よ
争ふ時鋒然として風発り二龍青潭よ戦ふと沛然
として雲起るもかくぞなるべき迭の奮勇ぎバー捻
ぬふをとそなは七郎が力やまさるをん歟とみたる
声めりとも忽ちち王冠と組伏せて縄をかけんと志
たりしふ彼も恥を知りたるものみや舌噛切く其
侭よ憤死ぬせーぞ哀ぬみもまさ勇まきき王あり
きと敵ぬがりも後々まて人々称讃きりしとぞ
かくて元軍ぬ僅少の敵よ襲撃さと脆くもうち

負け大将さん既ニ戦死あらーうと拒ぎ戦ふ気力もなくらとも危うく見やるものこうり此時他の兵艦も敵の夜撃を聞知りて數艘の兵艦我将士の乗居る艦を十重二十重ニ四方より重ーて取かゝ努弓をりて射掛る矢ゝ雨霰ニ異ならぎさーゝも剛気の我兵も衆寡敵せぢ今ちやは是まぢうりと奮激突戦小勢なれども勇将猛卒死ねやくと七郎が劇ーき指揮ニ必死の鋭鋒挑ゝ戦ふその折ふり思ひグチ後の方より北條実政總軍を船ニうち乗せ虜艦を目掛てさーづめ弩づめ攻撃弓勢侮りがゝく最初の本事ニ懲たる上今まさかゝる大兵と不知案内の海上ニて夜戦ゝ殊ニ危うーと虜將等遂ニ志賀島ニ上陸まると得ぢ楫を轉じて戦ふつぢ逃まて鷹島ゲ沖ニ碇泊ち

通俗日本小史六編之上終

010190512938